時の贈り物［第71回　明治時代の加悦町の地図］

加悦区には2枚の古い地図が保管されています。これらのうち、今回紹介するものは、題や年代が書かれていないので歴史地理学の分類上、「加悦町地引絵図」と名付けることができます。大きな地図で、制作様式から推察して、明治時代に作られたことがわかります。また、「加悦町」と名付けていますが、この「加悦町」は、江戸時代初期の慶長7年（1602）から明治22年（1889）の市制・町村制が施行されるまでの町村区分に基づくもので、「今の加悦区」域に相当します。写真は北を上に示しているので、中央に野田川が流れ、その左側が加悦の居住区（町場）です。

さて、この地図に描かれた様子と今を比較すると、風景の遷り変りを想像することができます。

例えば、町場を南北に通る「ちりめん街道」が4ヵ所で「L」の字に折れるルートになっていることがわかります。まっすぐ進めないのです。これは加悦が城下町だった時代の名残りと想定されている「クランク道」で、わざと「L形」にしたものということです。

このように、古地図には暮らしの身近な歴史情報が描かれている文化財的価値を持っています。

左／ちりめん街道部分のアップ
右／全体（210.9cm × 336.5cm）

時の贈り物［第72回　尾藤家の襖に描かれた山水］

ちりめん街道・旧尾藤家住宅の奥蔵には季節やお客様によって取り替えられる、さまざまな襖絵が残されていました。その中から明治時代の京都の画家、久保田米僊（1852～1906）が描いた六面の襖絵を紹介します。

与謝野町指定文化財「山蘭雲泉図」は二つの絵が組み合わされたもので、賓客用の座敷を飾りました。

まず明治12年に「清鐘落日図」四面が描かれ、一年半後に「高山書屋図」二面が描かれました。座敷の南に四面、西側に二面と、L字に配置された二つの絵には、実は連続した物語があるのです。

川向こうに大寺を望む水辺に家を構える人物が蓮の花を愛でつつ寺の鐘の音に耳を傾けています。ふと、俗世を離れ切り立った山中で蘭の花を愛でる日々を送る友人を思い、早速手紙を送りました。描き足された二面では、その手紙が今まさに使いの童子によって山奥の友人に届けられようとしています。

平地の大河と山奥の草庵、スケールの大きな自然を挟んで営まれる、文人同士のなんとも風雅な交流が描かれています。

この襖絵は4月から江山文庫で開催中の山水画の企画展でご覧いただけます。

（与謝野町教育委員会）

久保田米僊筆「清鐘落日図」明治12年作
町指定文化財「山蘭雲泉図」のうち四面

久保田米僊筆「高山書屋図」明治14年作
町指定文化財「山蘭雲泉図」のうち二面

時の贈り物［第73回　古民家のみかた「格子」］

町内の古民家の「格子」についてご紹介します。古民家にみられる格子は、木や竹などを縦や横に並べて組んでつくる建具です。外から風や光を取り入れつつ、通りを行き交う人の視線を遮ります。また、窓ガラスに物が当たりにくくすることができますし、防犯の役割も果たします。このように、格子は、建物の内と外を完全に遮ることなく結びつけることができる、とても機能性が高い建具です。

格子には、糸屋格子、米屋格子、酒屋格子などと呼ばれるものがあり、かつては、格子の意匠や形状で職業を表していました。例えば、糸屋格子は太い格子1本と細くて少し短い格子（切子）3本を組み合わせた2種類の格子の組み合わせです。また、切子の数が4本は織屋格子、2本は呉服屋格子などと呼ばれます。これらの繊細な格子は、江戸時代以降、大工道具の発達によりつくられるようになり、その後、基本の形に変化が加えられるようにもなりました。

呉服屋格子

また、格子を据え付ける敷居の高さもさまざまですが、敷居が人の腰の位置くらいにある高いものは、丹後地域に特徴的なもので、ちりめん業が盛んで、機屋が多かったことが影響していると考えられています。

日中、やわらかい光が差し込む中、格子越しに見える通りの様子は、1枚の絵画のようです。夜は、屋内から淡くもれる光が通りをやさしく照らします。建物の内と外を穏やかにつなぐ格子、内と外、それぞれに心地よい距離感・空間を生み出しています。与謝野町内にも美しい意匠の格子が多くみられます。探されてみてはいかがでしょうか。

与謝野町教育委員会

時の贈り物［第74回　下山田愛染堂の石灯籠］

下山田区の江陽台北側の山手にある竹薮の山裾を入っていき、段差を二段上がると愛染堂が建っており、その左手に古い石灯籠があります。

この石灯籠は、高さが213センチあり、いわゆる「丹後型燈籠」と呼ばれるもので、灯籠の頂部の高い請花と長い茎を持った大きな宝珠がかたどられています。残念ながら、中台は後世に後付けされたものです。

また、竿の上下段には刻銘があり、上段は『応永卅三年丙　七月五日』、下段は『願主　少都』と読め、応永33年（1426）に作られたことがわかります。

数少ない室町時代の貴重な作ということで、昭和62年10月12日に町指定文化財に指定されています。

さらに、この石灯籠は、その刻銘の年代から愛染堂の近隣にあったと伝えられている室町期に栄えた寺「菩提寺」との関連が考えられるものの一つとして挙げられています。

愛染堂では毎年9月の第3土曜日に、地元保存会による三社祭が行なわれます。今年は9月20日に開催されるようですので、足を運んではいかがでしょうか。

（与謝野町教育委員会）

下山田愛染堂の石灯籠
文化財の種別／工芸品（町指定文化財）
管理者／下山田愛染堂保存会
時代／応永33年（1426）

時の贈り物［第75回　丹後ちりめん始祖伝］

丹後ちりめんが始まったのはいつでしょうか？

言い伝えによると、江戸時代中頃の享保年間、徳川幕府8代将軍吉宗の時代とされています。ちりめん織りの技術は、丹後で発明されたものでなく、丹後出身の先人が京都西陣で技術を習得して当地に広めたと言うものです。

丹後ちりめん始祖とされる人物は峰山藩では峰山の絹屋佐平治、宮津藩では後野の木綿屋六右衛門、三河内の山本屋佐兵衛、加悦の手米屋小右衛門の4人と言われています。

まず、享保5年（1720）に絹屋佐平治がちりめん織りに成功し、続いて、享保7年（1722）に山本屋佐兵衛らが成功したと言うものです。

また、この加悦谷の3人（木綿屋・山本屋・手米屋）は、問屋であった木綿屋の仲介で、山本屋と手米屋が西陣に出向いたと伝わっています。

丹後を支え続ける丹後ちりめん産業は、6年後の2020～2022年に、丹後ちりめん創始300年間を迎えます。

（与謝野町教育委員会）

加悦谷の丹後ちりめん始祖の墓碑

手米屋小右衛門（加悦区・吉祥寺境内）

山本屋佐兵衛（三河内区・中岡墓地）

木綿屋六右衛門（後野区墓地）

時の贈り物［第76回　加悦奥川改修実測平面図］

付け替えられた加悦奥川

今、河川改修工事が行われている加悦奥川の歴史を少し紐解いてみましょう。

加悦区有文書に「加悦奥川改修実測平面図」（以下、「改修図」）があります。「改修図」をみると、川が今よりも大きく蛇行していたことがわかります。これだけ蛇行していると、洪水をたびたび起こしたことでしょう。「改修図」には「新加悦奥川」の付け替え計画線が描かれています。

■計画と工事の年代

「改修図」には製作年代が書かれていませんので、他の資料から推察すると、加悦町議会議事録の明治45（1912）年度議案第14号「加悦奥川改修」に改修計画がありますので、「改修図」の作成年代は、明治45年（大正元年）の可能性が高いと思われます。また、同大正14年議事録には、河川改修長2000間、川底4間、工事費6260円を大正15年度に繰越、とあり、また、大正15年12月5日開通の加悦鉄道の路線工事とも相まって、野田川合流点から大橋までの前半部の工事は、大正15年4月～11月に実施されたと推定されます。その後、大橋から上流域は、戦後昭和20年代のもので、昭和27年までには実施されたようです。

■公共工事の姿

この加悦奥川改修の前半部の工事は、住民の多額の寄付で実施されたもので、住民力で開通された加悦鉄道と良く似ています。これは大規模補助金制度以前の行政の姿を思わせます。

（与謝野町教育委員会）

加悦奥川改修実測平面図

時の贈り物［第77回　神宮寺境内の芭蕉句碑］

石川の神宮寺境内には、松尾芭蕉の早春の一句を刻んだ句碑が残っています。

春もやや気しきととのふ月と梅　　**芭蕉**

甫尺拝書

厳しい冬が終わり、空には月が朧に霞み、地上では梅の花がほころび、ようやく春の気配がただよい始めたようだ、と春の到来を喜ぶ句です。

芭蕉が丹後を訪れたかははっきりせず、元禄六年（１９６３）に詠まれたこの句も当地を題材にしたものではありません。ただ同じ句を刻んだ句碑は全国各所に50基以上存在しており、地域を限定しない普遍的な一句といえます。

「甫尺拝書」の添書きにあるように、句碑の筆跡は建立者である江戸時代中期の丹後俳人・甫尺（生年不明～１８０４）によるものです。

母親が岩屋の出身で宮津に生まれた甫尺は若くして画才を発揮し、宮津藩の御用紺屋白杉家の下絵職人を経て京都に出て、与謝蕪村と交流のあった三浦樗良に俳諧を学びました。蕪村の影響を思わせる俳画を多く描いたことから「丹後蕪村」とも呼ばれました。

蕪村が芭蕉を敬愛したように甫尺もまた芭蕉に傾倒し、「奥の細道」の旅を辿って各地を歩きました。芭蕉がかつて訪れた土地を題材に、芭蕉の句を下敷きにした俳画などを残しています。

晩年の甫尺は宮津に戻って丹後の俳人たちと深く関わり、芭蕉の顕彰につとめました。神宮寺の句碑はその活動の一環として、芭蕉俳句の普遍性を広く伝えるべく建てられたのではないでしょうか。

（与謝野町教育委員会）

芭蕉句碑（神宮寺境内）

時の贈り物［第30回 「エンガキ」古民家にみる意匠と機能］

ちりめん街道の古民家にみられるエンガキは、街道と屋内とを仕切る建具です。街道に面したザシキの縁先に取り付けられています。格子戸と同じように、建物の内と外を完全に遮ることなく結びつける建具で、格子戸よりも通りに開かれています。

エンガキは、縁先の柱の外側に、溝を切った部材を縦向きに取り付け、そこに上から落とし込んで建てます。

エンガキは、ちりめん街道の町並みの特徴を表す要素のひとつです。ザシキの縁側が街道に面する主屋17棟のうち、10棟にエンガキが設けられています。これらの建物は、すべて昭和20年以前に建てられており、大正期、さらには江戸期のものもあります。

エンガキは、丹後地域で見られ、伊根浦では、板のものがあります。ちりめん街道のものは、細かい格子状のもの、屋号の文字をデザインに取り入れたものなど、手が込んでいます。縮緬業が盛んであったことを語っています。

このように古民家にはいろいろな魅力が詰まっています。時にはゆったり、ちりめん街道でエンガキを探す散歩はいかがですか。同じように見える格子とエンガキの造りの違いを実際に見るのも楽しいです。

格子とエンガキが混在することにより、個々の建物の外観だけでなく、町並みにも変化が生まれていることがわかります。

与謝野町教育委員会

衣替えの季節となりました。ちりめん街道の旧尾藤家住宅も、6月8日に衣替えをしています。「建物が着替える？」と不思議に思われる方もあるかもしれませんが、古民家も暑い夏に合わせて装いを替えるのです。

蒸し暑い日本の夏を快適に過ごすため、古民家にも色々な工夫が施されました。そのひとつが、建具の仕様を替えることです。ふすまや障子を、風を通す葦戸や御簾にします。

湿った高温の空気が建物内に留まると、木材が腐朽しやすくなります。葦戸や御簾は、室内の空気を多く入れ替えることができるため、建物を腐朽から守る働きをします。また、これらの見た目は、室内の涼しさを演出する心理的な効果もあります。

御簾を通して庭を見る　旧尾藤家住宅

葦戸とは、木製の建具の中に、すだれ状に編んだ「よしず（材料は葦）」を挟みこんだ建具です。また、御簾とは、部屋の仕切りなどに使う、上品なすだれのことです。

旧尾藤家住宅は、9月6日まで、夏の装いとなっています。風鈴を鳴らす風が、葦戸や御簾を通り抜け、室内でどのように感じられるのか、また、全く風がない時にも、視覚的に室内を涼やかに感じることができるのかなど、旧尾藤家で体感されてはいかがでしょうか。

建物のように、時には人も、夏着物や浴衣に着替えて、ちりめん街道を散策するなど、夏を楽しむのもよいですね。

与謝野町教育委員会

ちりめん街道」の建物群を例に、古民家の特徴の一つである厨子二階と虫籠窓についてご紹介します。ちりめん街道には、18棟を超える厨子二階の建物があります。厨子二階とは、一階の天井が二階の床を兼ねる建物の二階部分のことです。平屋建てよりも、空間を有効に使うために造られました。ちりめん街道のものは、すべて江戸～大正期に建てられており、この様式は、建築年代が古いことも分かります。

虫籠窓がある厨子二階の建物

一般的に、厨子二階の建物は、二階部分の階高が低く、主に物置として使われていました。そのため、窓がないものもあります。しかし、空間をより活用するために、階高を上げ、窓を設けるものも現れました。これらは、屋外から見ると、厨子二階であるか、本二階であるか分からないほどです。ただ、屋内からは、どちらの建物であるかを判断することができます。玄関や土間などから天井を見上げると、二階の床板を支える根太（構造材）が見えるものが、厨子二階の建物です。根太天井と呼ばれ、剥き出しの根太からは、木造建築の力強さが感じられます。古民家内部の意匠的な魅力の一つです。

階高の高い厨子二階には、光と風を取り入れるための、虫籠窓を設けたものが多いです。虫籠窓とは、土や漆喰で等間隔に塗り込めた格子状の窓のことです。この他、木や金属を用いたものもあります。虫籠窓は、建物の外観に変化を生み、街道の美しい町並みをつくり出しています。

与謝野町教育委員会